

研究ノート

近代化日本—欧米との関わりで見る日本の近代化—(8) — 世界史的視点から —

「歴史に見るやまい（病気・感染症）」(1)

松 原 正 道*

序

令和2（2020）年は、COVID-19と名づけられた「新型コロナ・ウイルス」によるインフルエンザで明けたと言っても過言ではない。

ウイルスは王冠の形をしたものが多いとの事からコロナと言われると言うが、今回のものについては、これ迄あったのとは違うと言う事で「新型コロナ」と言っている。

これについて、当初、湖北省武漢での発症が話題になったため、トランプ・前アメリカ大統領は、中国との政治的駆け引きからか、「チャイニーズ・ウィルス」と言っていた。我が国では、横浜港に停泊していたクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」の乗客の発症から大きく報道される様になるのだった。



写真1 クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」



写真2 「ダイヤモンド・プリンセス」航海再開の広告

この「新型コロナ」は、日本のみならず世界の国々にとっても大きな問題として、各国がその対応に苦慮している。

*淑徳大学名誉教授

新首相が誕生し、「自助・共助・公助」、そして、「絆」を基本姿勢として発表したのが、報道からすると、「新型コロナ」の撲滅を最重要事項として取り組むと言う姿勢が感じられない。固より、関係者・機関は日夜絶え間ない努力を重ねているのである。

長期化する中で、医療従事者は、自らの発症の恐れを意識しながらも、最大限の努力を以て、対症療法での対応を余儀なくされていると言う。

関係者の努力によって、他の国々と比べ、良好な状態が維持されているとは言えるものの、こうした努力は、一時的には可能ではあっても、長続きはしない。

今は、何を置いても、医療関係者が安心してこれに関わる事が出来る方策をとると言う事が喫緊の課題と言える。

コロナ対応のために、一般の治療に支障を来し、それによって経営が難しくなり、赤字の病院が増えているとも言われており、現場の医療従事者が安心して仕事が出来たとしても、経営が難しくなれば、元も子もないのであって、これの対応も、最優先とされて然るべきだろう。

当然の如く、ワクチン・新薬（特効薬）の開発に傾注する事は言う迄もない事である。それも国際協力を以て。

首相、政府が先頭に立って、与・野党が一つになったチームを以て取り組み、官民を挙げた関係者、場合によっては、個人も。医療関係者が、物心共に安心して治療に当たれると言う対応は出来ないものだろうか。発症した場合、安心して治療を受けられると言う事を含めて。莫大な予算も成立させている事でもあるのだから。

前首相は、「緊急事態宣言」を発し、「学校閉鎖と解除」、「安倍のマスクの配布」、「3密にならない」と行動の自粛を要請。そのため、企業も「自宅でのテレ・ワーク」に取組み、仕事改革に繋がった側面がある一方、経済が停滞、休業・廃業を余儀なくされた企業・商店が続出。

そこで、経済の活性化のためにと、「Go・Toトラベル」の施策を打ち出したが、自らは、体調不良で退陣。「新型コロナ」対策は、新首相とその政府に委ねられた。

前首相は、「国難」と言う言葉を度々使っていたが、これは「国難」ではないのだろうか。今や、「世界難」とも言える。

幸い、日本は、他の国々と比べまだ良い状態である。「人」の往来で他の国からの影響を受け憎い島国であり、一国で、効果が期待出来る側面があると言える。

固より、一国主義を取るのではなく、世界の国々と連携しながら対応を考えていかなければならない。

「紀要」48号が世に出る頃には、この問題が終息している事を念願している。

筆者は、これ迄の研究の中でも、自然災害や「やまい（病気）」が、歴史にどの様に関

わって来たかと言う事についても注目していた。

コロナ禍の現在、時宜を得ていると思われるので、今回、「歴史に見る『やまい（病気・感染症）』』と言うテーマで、世界史の歩みの中で、「やまい（病気）」が、歴史にどう影響したかと言う事を考えてみた。

本稿では、特に、日本を中心として、歴史と「やまい（病気・感染症）」との関わりについて考えてみる。

1章 「やまい（病気）」とは

I. 百科事典に見る「やまい（病気）」

先ずは、百科事典に見る「やまい（病気・感染症）」の様々について考えてみる。

1. 病気 [ビョウキ] (disease)

生物の正常な状態がそこなわれ、生命維持機能が阻害あるいは変化すること。病気のとらえ方は歴史や文化、社会によって異なるが、ここでは西洋医学に基づいて述べる。病気の原因はさまざまである。その1つに、外部から生物の体内へ微生物が侵入することによって起こる外因性の病気が考えられる。たとえば細菌類、ウイルス、⇒真菌類、寄生虫などの有害物質の侵入である。過去に人類の人口増減や民族の興亡の要因となった⇒ペストや⇒痘瘡などの疾病が代表的である。第2に、生物体内の先天性あるいは後天性の構造的欠損や、生理的な機能以上によって起こる内因性の病気がある。たとえば、血中の糖分を代謝する⇒インスリンという⇒ホルモンの分泌が不足するために起こる⇒糖尿病がこれにあたる。このほかに、内因性の要素と外因性の要素が混ざり合って起る病気もある。環境の変化に対応できなかったときにも、生物の体内に有害な変化が生じるし、食事内容の変化や微生物などの侵入によって、生理的な機能異常や成長障害が引き起こされることがわかっている。

CACIO XD- GT6800 ブリタニカ国際大百科事典

と言われるのである。

「やまい（病気）」には、外因性と内因性とがあると言う。特に、外因性のものとして（1）細菌（細菌類）、（2）ウイルス、（3）真菌類、（4）寄生虫の4種が言われるのである。

それぞれについて確認する。

先ずは、インフルエンザに代表され、現在、世界中を席卷し、各国でこの対応に苦慮している、「新型コロナ」禍を齎している「ウイルス」について見てみる。

(1) ウイルス (virus)

ビールス,あるいは素焼きの陶器を通過してしまうことから濾過性病原体ともいう。細菌より小さな生物群で大きさは10~300nm。増殖には生きている生物の細胞を必要とし,それぞれの種に応じた生物に寄生するので,寄生宿主の種類によって動物ウイルス,植物ウイルス,細菌ウイルス,昆虫ウイルスなどに分けられる。また,特有な病変を起すので,その病名で肝炎ウイルス,インフルエンザウイルス,麻疹ウイルスなどと呼ばれる。ウイルスは化学的にはタンパクがその主体をなし,外殻には核蛋白,内側には遺伝子である核酸を含んでいる。ウイルスの感染性はこの核酸部分にあり,核酸はデオキシリボ核酸(DNA)とリボ核酸(RNA)などがあるので,DNAウイルス,RNAウイルスなどと分類することもある。外形は球形,円筒形,正二十面体などさまざま。治療には一部のウイルスを除いて,抗生物質は効かない。

ブリタニカ

と言われ,こうしたウイルスによって齎される「やまい(病気)」について,「ウイルス病」があると言う。

① ウイルスびょう【ウイルス病】

ビールス病とも。ウイルスによる人間,動物(家畜),植物(農作物)の病気。

(1) 医学。特定組織に対する親和性が顕著なものが多い。たとえば皮膚親和性(天然痘,ヘルペス等),呼吸器親和性(インフルエンザ,ヒトコロナウイルス等),神経親和性(狂犬病,ポリオ等),内臓親和性(肝炎,黄熱病等)など。一般に強い免疫を与え,各種ワクチンは予防に有効であるが,特効的な化学療法剤,抗生物質はまだ発見されていない。

(2) 家畜。家畜法定伝染病にはウイルス病が少なくない。牛疫,口蹄(こうてい)疫,狂犬病,馬伝染性貧血,豚コレラ,ニューカスル病,流行性脳炎(日本脳炎)など。そのほか牛痘,ジステンパー等が有名。人畜共通の伝染病も多く,特に重要なものは狂犬病と日本脳炎である。

(3) 農業。代表的なものは各種の委縮とモザイク病である。(後略)

CASIO XD-GT6800 百科事典 マイペディア

と言うのである。

そして,このウイルスについては,

厳密に言えばウイルスは生物ではないが,無生物でもない。彼らは
冥府めいふのようなある種の中間的な世界に存在し,再生する細胞の機構を
乗っ取って,ビリオン(ウイルス粒子)のコピーを無数に量産する

チャンス进行じって待ち構えている。多くの場合、宿主となるターゲットは決まっており、特定のウイルスが感染するのは、人間かある種の動物に限られる。

マイケル・オスターホルム＋マーク・オルシェイカー 五十嵐加奈子・
吉峰英美・西尾義人訳『史上最悪の感染症』青土社 2020 86頁

と言われるのである。

こうした事からすると、ウイルスとは、中々、手強そうで、現在、世界の国々が「新型コロナ」に苦慮している事が理解出来る様な気がする

ところが、その一方で、

これまでウイルスは、病気をもたらす厄介者としてしか考えられなかった。しかし、RNAウイルスの一種のレトロウイルスは、自分の遺伝子を別の生物の遺伝子に組み込むことによって、生物の進化の原動力にもなってきた。

石弘之『感染症の世界史』角川文庫 令和2 52頁

と言われ、

生物は感染したウイルスの遺伝子を自らの遺伝子に取り込むことで、突然変異を起こして遺伝情報を多様にし、進化を促進してきたと考えられる。

同上書 53頁

とも言われるのである。

そして、

ウイルスが哺乳動物の胎児を守っていることも明らかにされた。胎児の遺伝形質の半分は父親に由来するもので、移植された臓器のように母親の免疫系にとっては異質な存在だ。(中略)拒絶反応を引き起こす母親のリンパ球は、一枚の細胞の膜に守られて胎児の血管に入るのが阻止されていた。1970年代に入って、哺乳動物の胎盤から大量のウイルスが発見された。(中略)つまり、ウイルスは生命の本質部分を握っていることになる。

同上書 53-4頁

と言われる様に、物事には、須く、二面性があり、「新型コロナ」の様に感染症をもたらす厄介なものではあるのだが、ウイルスでさえ、上記引用に見られる如くに、哺乳動物にとっ

て、その誕生のためにはなくてはならない重要なものだとも言われるのである。「人（ヒト）」も哺乳動物である。

（２）さいきん〔細菌〕

バクテリアとも。原核細胞からなる単細胞生物。普通は真正細菌類を指すが、放射線菌、糸状菌、スピロヘータ、紅色細菌等も含めることもある。大きさは幅 $0.2\sim10\mu\text{m}$ で、細胞膜と細胞壁を持つが、核・葉緑体・ミトコンドリアなどの構造を持たない。形態によって、球菌、杆（かん）菌、らせん菌等に大別される。またグラム染色によってグラム陽性菌とグラム陰性菌とに大別される。ブドウ球菌、連鎖球菌などはグラム陽性菌で、ペニシリンなどに対する感受性が高い。大腸菌、サルモネラ菌、赤痢菌などはグラム陰性菌。細胞の2分裂により増殖、または内生孢子を形成。無機物のみで発育する独立栄養菌、有機物を必要とする従属栄養菌があり、発酵・呼吸（嫌気〈けんき〉）性菌、好気性菌）によってエネルギーを得る。寄生するもの、病原性を有するものもある。地球上の物質循環に大きな役割を果たし、発酵、汚物処理などで農工業に、抗生物質、ビタミンの生産、遺伝子工学での有用タンパク質の製造などで医薬学に利用される。また、発病や免疫の機序、遺伝の機序などの生物学研究の道具ともなっている。

マイペディア

とある。

これについては、人間や動物の「やまい（病気）」の病原となる細菌ではあるのだが、一方では、酵母菌に代表される様に人間の生活面で有用な働きをしたり、青かびから合成されると言うペニシリンの如くに、細菌ではありながらも逆に治療薬としての働きをするものもある。

そうした中に、「腸内細菌」と言うものがあると言う。

① ちょうないさいきん〔腸内細菌〕

ヒトや動物の腸内に生息する細菌の総称。ブドウ糖を分解して酸、または酸とガスを生成したり、ビタミン類の合成、ホルモン合成の手助け、免疫反応の関与などのほか、抗菌性物質をつくって感染を防ぐ働きをする。通常は無害だが、免疫力が低下すると内因感染の原因菌ともなる。

マイペディア

と言われるのである。

そして、その「腸内細菌」について、

人の腸管には約1千種類、100兆個もの腸内細菌が生息していると

され、便には多くの腸内細菌が含まれる。細菌が腸内でつくる群れは、「腸内細菌叢（腸内フローラ）」と呼ばれ、その乱れは、腸の病気だけでなく、アレルギーや精神疾患にも関係していると言われている。

『朝日新聞』2020年8月20日（木）夕刊

と言う作用をしていると言うのである。

また、

「腸内フローラの乱れが関連する病気」として、肥満・糖尿病・大腸がん・動脈硬化症・炎症性腸疾患・精神疾患・アレルギーなど（後略）

同紙

と言った様々な「やまい（病気）」の原因と言われるのである。

だが、その一方で、今や、

医療の現場では、健康な人の便から取った腸内フローラを移植する「便移植」が始まっている。

同紙

とも言い、そのために、

「便は『茶色いダイヤ』と注目を集めています」

同紙

と言われる様に、「便」を商品としたビジネスが始まっているとも言うのである。

これが本格化されれば、リサイクル、省資源にとって画期的なものとなると共に、これが、軌道に乗る事で、「人（ヒト）」が生きている限り資源は無尽蔵と言う事にもなるのである。

かねがね、「人（ヒト）」の排泄物の活用方法があればと考えて来た者として、光が見えてきた様な気がする。これにより下水にかかる費用も少なくなる事も期待出来るかもしれない。

細菌類の生産する物質や、種々の物質を分解する能力のうちには、人間にとって重要なものも多い。例えば抗生物質の生産や、汚染排水の浄化などのように、いろいろな面で活用されている。

ブリタニカ

と言われる様に、細菌（バクテリア）が下水処理のために活用されているのは周知の事実である。

下水道 省エネへ改良

都の施設では、全国的な主流の処理法である「活性汚泥法」で汚水をきれいにしている。ここで活躍するのは、顕微鏡でしか見えないような小さな微生物だ。つまり下水処理では、バクテリアなどの生物のパワーを借りて、汚れを除いている。活性汚泥とは、この「微生物を含んだ汚泥」と言う意味だ。（中略）処理場のメイン舞台は、巨大な反応槽だ。汚れのもとであるりんや窒素を取り除く反応槽は、内部が「嫌気槽」「無酸素槽」「好気槽」と呼ばれる3室に分かれている。それぞれの槽内で、りん蓄菌や脱窒菌、消化菌といった異なる微生物が活躍する。

『朝日新聞』2020年（令和2年）10月15日（木）夕刊と言う。「バクテリア」と言う言葉が使われる事が多い「細菌」の活用の状況が記されているのである。尤も、この記事は、「省エネ」の取り組みについてなので、

都の改良では、このうち無酸素槽と好気槽を一つにまとめ、上下方向に流れる渦をつくって内部をゾーン分けすることで、それぞれのゾーンで脱窒菌や消化菌がうまく働くようにした。（中略）1室にまとめることで、ポンプの電力消費を減らし、（後略）

同紙

と言う事に止める。

更に、[真菌]と言うものがあると言う。

（3）しんきん【真菌】

菌類に含まれる一部門。葉緑素をもたない真核生物で、単細胞あるいは連なって糸状体をなす。子囊菌類と、担子菌類、鞭毛菌類、接合菌類、不完全菌類の5つのグループがある。単細胞の代表は酵母、糸状体はカビ、菌糸が大型化し複雑な構造をとるのがキノコである。普通、真菌類と変形菌類を合わせて菌類と総称するが、変形菌類を含めないこともある。

マイペディア

それに基づく、[真菌症]と言うものがあると言う。

① しんきんしょう【真菌症】

広義の真菌類に属する種々のカビによる病気の総称。普通は白癬（はくせん）、癩風（てんぷう）などの皮膚真菌症を除き、カンジダ、アスペルギルス、クリプトコッカス、

ムコールなどの寄生によるものをさす。主として肺，消化器，腎臓，中枢神経，皮膚，女性生殖器等に見られる。抗生物質の使用の増加とともに菌交代症として頻度（ひんど）を増している。治療はアンフォテリシンB，ニスタチン，トリコマイシンなどの抗真菌薬を用いるが，あまり強力ではなく副作用もあり，一般に難治である。

⇒アスペルギルス症／⇒肺カンジダ症

マイペディア

と言うのである。

そして、「寄生虫」も，また，「人（ヒト）」の身体を蝕み，「人（ヒト）」に「やまい（病氣）」を齎すのである。

(4) 「きせいちゅう [寄生虫]」

人畜に寄生して病害を起す生物中，普通は原虫以上の大きさをもつものをいう。内部寄生虫に原虫，キュウチュウ（吸虫），ジョウチュウ（条虫），センチウ（線虫）などがあり，マラリア原虫，ハイキュウチュウ（肺吸虫），カンキュウチュウ（肝吸虫），無鉤（むこう）条虫，カイチュウ（回虫）などはよく知られた例である。外部寄生虫にはダニ，ノミ，シラミ，カなどがある。

マイペディア

と言われる様に，内部寄生虫と外部寄生虫とに分けられると言う。

この内部寄生虫の代表とも言える回虫駆除のため，学校で行われた検便，「サントニン」等を服用した経験がある「人（ヒト）」は未だ多くいるだろう。

また，戦争等で外地へ渡った者の中にはマラリア蚊に悩まされ死に至った「人（ヒト）」も多い。後述する，『沖縄「戦争マラリア」』と言った悲劇もあったのだ。

戦後の不衛生な状態の中，発疹チフスを齎す虱，ペストを媒介する蚤，時に，南京虫，ダニ等の外部寄生虫に悩まされた「人（ヒト）」も多くいる。

「人（ヒト）」を悩ますものとして「ウイルス」，「細菌」，「真菌」，「寄生虫」の4種類が挙げられ，「菌類」から派生したものに「黴（カビ）」があるが，それは，腐敗の原因となるのだが，薬に転用される物もあり「人（ヒト）」の生活に資してもいる。

上記の4つの病原を原因にした「やまい（病氣）」に，「感染症（伝染病）」と言われるものがあるのだが，これが，「人（ヒト）」にとって大変厄介な存在となるのである。

Ⅱ. 感染症 [カンセンショウ] (infectious diseases)

微生物の感染によって起こる疾患をいう。病原体別に，細菌感染症，ウイルス感染症，リケッチア感染症，スピロヘータ感染症，真菌感染症などに分けられる。感染症の

うち、病原体の毒力が強くて、人から人へと連鎖的に感染の広がるものを、特に伝染病と呼ぶこともある。病原体は、健康人には通常みられない病原菌であることが多いが、ブドウ球菌や大腸菌のように人体に常在するものが突然、病原性をもつようになることもある。さらに、化学療法の進歩に伴う薬剤耐性菌の出現や菌交代現象（⇒菌交代症）も関係して、感染症の病態も変貌しつつある。感染経路としては、接触感染（性病）、飛沫感染（インフルエンザなど）のような直接感染と、食物や動物を介する間接感染（食物→腸チフス、カ→日本脳炎など）とがある。一般に、感染してから⇒潜伏期があり、次いで前駆症状が出て、そののちに発症することが多い。感染症に対する治療は、患者の血液、尿、髄液、喀痰などから早急に病原体を検出し、最も有効な抗生物質を選んで投与する。

ブリタニカ

と言う。

同じ「感染症」にしても、性病の様な「接触感染」、インフルエンザの「飛沫感染」と言った「直接感染」のものと、食物による腸チフスや蚊が媒介するマラリアの様な「間接感染」とに分けられると言う。

「直接感染」のうちの「接触感染（性病）」、「間接感染」の食物によるものは、「人（ヒト）」の注意で以てこれを回避する事が出来るが、「飛沫感染」や蚊の様なものによるものは余程注意していないと難しい。

そうした中でも、「直接感染」で、「ウイルス病」として「飛沫感染」し、その都度、姿を変えて現れるインフルエンザは、特に、その対応が難しいと言わざるを得ないわけである。

そのため、今日の「新型コロナ」によるインフルエンザの様に、「最も有効な抗生物質を投与する」とは言うものの、いつも同じ型のものが起こるわけではなく、「起こってみなければ、分からない」と言う側面があるため、起こってみて、始めてその対応策を考えようのが現実の様である。

そのためにか、「新型コロナ」が話題になり始めて1年になるが、現代の科学・技術を以てしても、今のところ、罹患予防の「ワクチン」にしても、罹患後の対応のための新薬（抗生物質）にしても、決定的なものは未だし、と言う感じなのである。それだけ、「新型コロナ（インフルエンザ）」は、「人（ヒト）」にとって制御し難い厄介なものだと言えるのである。

Ⅲ. 新薬開発

「新型コロナ」のそれとは違うが、2018年、肺がん患者が新薬開発のための治験に、「お金を集めたら、治験をやってもらえますか」と尋ねたところ、専門家の教授は、「できます。

しかし、治験の運営費として2億円、薬剤費も必要で10億円以上かかりますよ」と言ったとの事。『『タグリッソ』という抗がん剤』だと言うが、関係者の尽力により、「通常、患者数が少なく採算が見込めない場合、製薬企業は治験に及び腰だ」と言われている中で、「治験は(2020年)8月末から始まった。試験期間は4年」,「順天堂大病院や九州大病院, 国立がん研究センター東病院など15の医療機関で実施され, 約70人の患者を予定している」と言う記事が掲載された。(『朝日新聞』2020年〈令和2年〉10月15日〈木〉 夕刊)

これ程、新薬開発に時間と資金が掛かるのだと言う事を認識させられた。これは、「タグリッソ」の場合であって、他の「やまい(病気)」のための新薬開発では、また、時間も費用も違って来るのだろう。

こうした、「通常、患者数が少なく採算が見込めない場合、製薬会社は治験に及び腰だ」と言われる様な、少数者の為にも対応するのが政府・行政の役割だと言えるのだが、難しいのだろうか。

その点、「新型コロナ」は、世界中に患者が多数いるので、各製薬会社は競ってその開発に取り組めるわけである。

そして、派生的に起こる風評被害を含め「新型コロナ」による恐怖に「人(ヒト)」は悩まされ、多くの「死」が齎されているのである。それは、医療関係者においてでさえも。

そうした中、

米製薬、ワクチンの治験一時中断

新型コロナウイルスのワクチン開発について、米製薬大手ジョンソン・エンド・ジョンソン(J&J)が最終段階に入っていた臨床試験(治験)を一時中断したことが12日、明らかになった。米医療メディアが報じた。J&Jは「参加者に説明できない病気が起きたため、全ての治験で参加者への接種を一時中断した」との声明を発表した。(中略)

ワクチンの治験が一時中断することは珍しくない。9月初めには、英アストラゼネカが開発するワクチンでも英国の参加者に神経系の症状が出て中断したが、1週間ほどで再開した。一方で、米国ではアストラゼネカのワクチンの治験はまだ止まったままだ。J&Jのワクチンは、米国内で最終治験段階にある4つのワクチン候補の一つ。日本でも9月に初期段階の治験が始まっている。

『朝日新聞』2020年(令和2年)10月13日(火) 夕刊
と言う事が報道された。それ程、「新型コロナ」の対応が難しいと言う事か。

その一方で、

ロシア、ワクチン承認2例目

ロシアのプーチン大統領は14日、新型コロナウイルスの感染を予防する新たな国産ワクチンを承認したと発表した。ロシアがワクチンを認可するのは、8月に国際的に求められている最終段階の大規模な臨床試験を行わずに承認した「スプートニクV」につぎ2例目、今回も最終試験は省略した。

同紙 2020年（令和2年）10月15日（木）夕刊
と言う記事が報道されたのだが、「最終段階の大規模な臨床試験を行わずに承認した『スプートニクV』」、「今回も最終試験は省略した」と言ったものだそうだ。

と言っている中で、

アビガン 承認を申請

コロナ治療に適応拡大 来月にも

「治験結果 満点ではない」製薬会社幹部

新型コロナウイルスの治療薬候補「アビガン」について、富士フィルム富山化学は16日、厚生労働省に製造販売の承認を申請した。今後、厚労省が審査する。承認されれば、日本で開発された薬では初となる。ただ動物実験で胎児に奇形が出る恐れがあるとわかっており、妊娠中やその可能性のある女性らには使えない。（中略）政府関係者によると、11月にも承認される見通しだ。（中略）「結果は100点満点ではない。特効薬とまでは言えない」と話す。

同紙 2020年（令和2年）10月17日（土）朝刊
との報道があり、「特効薬とまでは言えない」との事だが、少しは光が見えて来たとも言える。

一方、

ワクチン治験の参加者 死亡

南米ブラジルの国家衛生監督庁（ANVISA）は21日、英オックスフォード大と英製薬大手アストラゼネカの新薬コロナワクチンの治験参加者が死亡したと明らかにした。（中略）死亡したのはリオデジャネイロの男性医師（28）で、死因は新型コロナの合併症だという。接

種したのはワクチンではなく、偽薬だったと伝えている。

同紙 2020年(令和2年)10月22日(木)朝刊

と言う記事が掲載されていた。

そして、

感染症は人類すべてが直面する最も恐るべき敵、言わば最悪の敵だ。感染症は誰もがかかりうる唯一の病だが、それだけではない。集団感染—ときにはとてつもない規模での感染が引き起こされる唯一の病なのだ。心臓疾患や癌、アルツハイマーなども個々の患者にとって甚大な影響を及ぼしかねない病であり、治療法につながる研究は称賛に値する。だがそうした病には、日常の社会機能を一変させ、交通や通商、産業をストップさせ、政情不安をもたらすほどの威力はない。

オスターホルム+オルシェイカー 前掲書 18頁

と、心臓病、癌、アルツハイマー等の「やまい(病気)」は、罹患者にとって、「死」を意識させられる恐ろしいものではあるのだが、それは、他者にうつる事はないため、飽く迄も、個人としてのものだと言うのである。

それに対して、感染症は、「最悪の敵」と言われる様に、「やまい(病気))」としての感染と共に、「人(ヒト)」の社会活動を麻痺させる事にもなるのであって、それは、「新型コロナ」問題で、世界中の「人(ヒト)」が、日々、痛感させられている。

IV. 感染症に対する社会的対応

国内感染10万人超

初確認から9カ月微増の傾向続く

1月15日に国内初の感染者が確認されて9カ月余り。重症化率や致死率は春先より下がったものの、下げ止まっていた新規感染者数は10月以降、微増の傾向が続く。

『朝日新聞』2020年(令和2年)10月30日(金)朝刊

そして、

新型コロナの国内感染者が29日、新たに809人確認され、累計10万人を超えた。同日夜までに確認された死者は1,761人となった。

同紙

と言い、

日本の人口の1割超が暮らす東京都で3万人を超え、全体の3割を占めた。（中略）厚労省の資料によると、1～4月の全体の致死率は5・62%。

同紙

と言うのである。

これに従えば、国情の違いがあるとは言うものの、感染者が780万人を超え、死者が21万人超のアメリカと比べ、比較にならない数字である。

「感染症」は、「人（ヒト）」であれば例外なく罹患する可能性があり、他の「やまい（病気）」と比べて、大きく違い、社会に与える影響も「甚大」と言う言葉が当てはまる程大きいのである。従って、社会的対応が重要になってくるわけである。

その点では、人口、罹患者数、死亡者数等個々にはいろいろ問題があるかも知れないが、我が国は、対応が良く出来ていると言える。国民性の故か。島国と言う事も大きいだろう。

そのために、「ワクチン」の様な予防薬や治療に有効な新薬（特効薬）が開発される迄は、医療とは別の側面で、社会的対応の比重が大きくなる。

政府が率先し地方自治体、場合によると、地域社会、そして、個人に及ぶ対応策が必要とされるのだが、新首相の「自助・共助・公助」、そして、「絆」が、「新型コロナ」問題にどう関わっていくのだろうか。

罹患予防のための「自助」として、「手洗い」、「うがい」、「3密」を避けるための行動、そして、

マスクやっぱり効果あり

東大など実験 コロナ 飛散と吸い込み減

新型コロナウイルスの感染予防に、マスクはやはり効果がある—東京大医科学研究所河岡義弘教授（ウイルス学）らの研究グループが『実物』の新型コロナウイルスとマネキン人形を使った実験で確かめた。感染者がつけた場合にとりわけ効果的だという。米科学誌に論文が掲載された。

『朝日新聞』2020年（令和2年）10月22日（木）夕刊と言われるマスクの着用等は可能であり、日本ではかなり徹底している。医療体制の整備、ワクチン・新薬開発等については、「公助」を駆使する側面と言える。

大正期の第1次世界大戦中に起こった「スペイン風邪Spanish Influenza」は、我が国へも伝播したのだが、その対応については、当時の内務省衛生局を中心とした政府が、その時なりの対応をしたのであるが、それは、結局、個人の注意を促すものが中心だったと言える。

その点で、100年後の今日は如何がかと言うと、これ、また、似た様なものだと言わざるを得ないのである。その点で、100年経っても大して変わりが無いと言う感じであり、それが現実なのだろう。

この「スペイン風邪」については、大正11(1922)年、内務省衛生局がその詳細について纏めており、それが、平成20(2008)年、東洋文庫から復刻・出版された。

同書によると、

か ぜ よ ぼ う
 流感予防 (内務省衛生局)

- 1, 近ちか寄よるな—咳せきをする人ひとに
- 2, 鼻はな口くちを覆おほへ—他ひとの為ためにも
- 3, 予よ防ぼう注ちゅう射しゃを—転ころばぬ先さきに
- 4, 含う嗽がひせよ—朝あさな夕ゆうなに

内務省衛生局編『流行性感冒「スペイン風邪」大流行の記録—』

東洋文庫778 平凡社 2020 156頁

と記した標語48万枚を各府県に配ったり、5種類の予防「ポスター」を各府県に配布するために5千万枚印刷し、注意を喚起したと言う。費用の関係もあり、需要の少ない所にはそれなりの対応をしたとも言う。

マスコミの発達していない時代においては、ポスターでの注意の喚起は重要だったのだろう。政治の国民への対応が適切に行なわれたかと言う事になると、今回のそれでは、時宜を逸した「安倍のマスク」の例がある。

そこには、「インフルエンザワクチンは最も効果の低いワクチンのひとつで、毎年変える必要のある唯一のワクチンでもある。それはひとつには、インフルエンザの菌株が容易に変化するからだ」(オスターホルム+オルシェイカーホルム)と言われ、「起こってみなければ分からない」と言った側面を持つインフルエンザが持つ特性の故にと言えるのである。

ワクチン・新薬の開発、社会的対応の難しさからも、「人(ヒト)」にとって「最悪の敵」(同上書)と言う事にもなるのである。

そのために、嗽(含嗽 うがい)、手洗い、消毒、マスク着用の励行、「3密」を避けるため、不要不急の外出・会食・会合等の自粛、企業でのテレ・ワークの奨励、出入国の禁止、そして、学校閉鎖等々の対応が必要となる。

今回の「新型コロナ」においても、こうした対策を取ったのだが、未だ終息の気配はない。フランスでは、第2波が来たと言う事で、また、外出禁止令が出た。「スペイン風邪」

にしても、何時、何処で発生し、何時、終息したのかについて、明確にされていない。

近年、「安心・安全」と言う言葉が常套句の様に使われるが、「安全」は科学的根拠を以て示す事が出来るのだが、「安心」と言う事になると、これは、多分に心情的なものに依拠しており、「新型コロナ」問題にしても、これに纏わる色々な事が起こっている。

多発地の東京ナンバーの車に対する嫌がらせ、マスクをしていない者に対する叱責等々。

東日本大震災の際の福島県産の物産に対する風評被害も然りである。

そして、行動の自粛、国によっては命令のため、自由に外出出来ない事により「人（ヒト）」を憂鬱にし、また、往來の停滞は社会を暗くし、経済活動を低迷させている。予防のための行動の自粛と経済の発展とは背反するのである。

従って、この両者の兼ね合いが難しく、このあたりを判断し施策するのが政府の役割だと言える。

飲食店等中小企業の多い商店の中には廃業を余儀なくされた店もかなりあり、それに伴う雇用問題を始め様々な問題が起きているのである。そのため、政府は、そうした店、従業員への対策として給付金・補助金の給付を行い、その最たるものとも言えるのが、各個人への10万円の給付だ。これには経済の活性化を促すという側面もある。

そして、「Go Toトラベル」、「Go Toイート」、出入国の緩和等を打ち出し、その対応を行い始めたのであるが、今後、それはどの様な形で影響が出てくるのだろうか。そして、これらの裏付けになるのは税金なのである。関係者の努力を「是」とし、有用な事ではあるとは思いますが、これらの施策は「各論」の域を出ていないのである。本質は、「新型コロナ」禍の終息である。

金融機関の支店で従業員の1人が罹患したため、支店員全員が2週間の自宅待機となったと言う。仕事は他店の者達の応援で何とか処理出来たとの事だが、家族との接触も控え、日常の買い物も配偶者がし、自分は、只管、自室に籠る生活を強いられた。

そのため、「今日も会社へ行かなければならないのか」と言いながらも出勤していた「普通の生活」が、如何に幸せだった事かとの述懐を聞かされた。

企業によっては、テレ・ワークを余儀された事により、仕事改革が出来る様になったとも言われるのだ。

歴史をみるまでもなく感染症の研究や対策は、社会制度、政治、社会心理などとの関係が極めて深いことがわかります。この状況は現代でも変わりません。

加藤重孝『人類と感染症の歴史—未知なる恐怖を超えて—』
丸善出版 令和2 序

と言われるわけだが、「やまい（病気）」、特に、感染症に関しては、他の病気に対する対応とは別に、政府・行政・地域社会と言った社会の体制が、これを予防し蔓延を防ぐ事を可能にする面が大きいのである。ワクチン、新薬（特効薬）の開発・使用が未だしの現在、その拡散については政府・行政・社会の取り組み方次第で左右される側面が大きいのである。

昔の話ではあるが、

「癪に罹るものは、法華経誹謗の悪行の結果だ」

理崎哲『忍性の真実—極楽寺良観と戒律』哲山堂 2018 83頁
と言われる様な、罹患者に対する誹謗・中傷、風評被害と言ったものが災害時に派生する事が多いのだが、こうした事も社会の在り方と関わるのであって、脳科学とか社会心理学等との連携で以て対応する事が出来ないものなのだろうか。

そして、日本発の「やまい（病気・感染症）」でない場合は、全て海外からのものであり、日本は、島国なので、水際作戦を採る事は他の国々と比べ有利ではあるが、令和2（2020）年から3年の冬は、通常のインフルエンザと「新型コロナ」とが重なるので、いつもの年より注意を要すると言われている。

インフルワクチン接種 韓国で12人死亡

1週間で 同国内の製薬5社製造

14日に接種した男子高校生が2日後に死亡したのを皮切りに、22日までに高齢者を中心に計12人が死亡。

『朝日新聞』2020年（令和2年）10月23日朝刊
と言う記事が載っていたと思っていたら、10月27日（火）のテレビのニュースによると、同じく韓国で、16日から26日の間に、59人の死亡が確認されたと言う報道があった。

V. 毒について

「人（ヒト）」の作り出した毒。

「人（ヒト）」を苦しめ、「死」に至らしめる物としては「毒」も言えるのであるが、これについては、『ブリタニカ』にも『マイペディア』にもその項目がないのだが、茸・河豚・青梅中毒の様に、誤って、毒素のある食物を摂取する事による場合が多いが、それとは別に、3万5千種以上もいると言う毒蜘蛛、水母、蜂等によるものもある。

クレオパトラ Kleopatra 7世（前69－前30 在位前51－）が、毒蛇に我が身を咬ませて、最期を遂げたと言う逸話は有名である。

ウイルスや細菌と比べると「毒」は、より人為的であり、「毒を盛る」と言う話は歴史上

多々ある。

古来、「人（ヒト）」は、漢方薬の強心・利尿作用の薬としての烏頭（うず）とか附子（ふし）と言われ、薬としても用いながらも猛毒と言われている烏兜（トリカブト）の様に、医療との兼ね合いで「毒」についても研究を重ねて来ているのである。

ルネサンス時代のイタリアでは、「ボルジア家の毒薬」と言う話があり、「マンドラゴラ」なるものがあったと言う。

そして、産業革命の一環としての化学の発達により人工の「物質」が作られ、薬品、肥料等の様に、「人（ヒト）」の生活向上に役立つ「物」が生み出されるのだが、その一方では、「毒」が数多く開発される様にもなるのだった。

特に、1871年に誕生したドイツ帝国における化学の発展に伴うそれは顕著で、第1次世界大戦（1914～18）で用いられ、大勢の「人（ヒト）」の「命」を奪った「毒ガス」と言う形で以て現実化されたのである。「人（ヒト）」が「人（ヒト）」を殺すために創った「毒」なのだ。

空気中の窒素と水素からアンモニアを合成すると言う「ハーバー・ボッシュ法」により、ボッシュ Bosh, Carl（1874－1940）も1931年に受けるが、1918年度のノーベル賞を受賞したポーランド生まれのユダヤ人ハーバー Harber, Fritz（1868－1934）の研究は、産業革命以後の急激な人口増に対応する食糧問題のために化学肥料を供給し、「人（ヒト）」に多大な恩恵を齎した。だが、第1次世界大戦では、「科学は、平時には、人々のためのものではあるが、戦時では国家のものである」とし、カイザー・ウイヘルム物理化学研究所の所長として「毒ガス」の研究に積極的に関わったと言うのである。

その時の彼は、「この毒ガスの開発は、戦争の終結を早めるためのものだ」と言ったと伝えられており、何やら、第2次世界大戦時の「原爆によって戦争終結が早まり、多くの将兵の命が救われた」と言う論理に繋がるものがあるとも言える。

科学（者）の持つ二面性。また、偏向した物の見方。これは、物理・化学と言った自然科学の分野に限った事ではない。人文科学、歴史学でも「皇国史観」と言った前例がある。

こうした彼の研究に対して、同じ化学者である妻クララは抗議の拳銃自殺をしたと言う。

その後、彼は、ナチスによる「ユダヤ人狩り」で多くの所員が摘発される中、若くしてキリスト教に改宗していたと言う事もあってか、免がれるのだが、自ら辞職。イギリスへの亡命の途次スイスで客死する。

その後、カイザー・ウイヘルム研究所は、ハーバーの「業績」、また、「過誤」の覚醒のため、その名を「フリッツ・ハーバー研究所」としたと言う。

こうして、第1次大戦で用いられた「毒ガス」。その延長線上のナチス・ドイツの「ガス室」。我が国では、「オーム真理教」による「サリン」は記憶に新しい。最近でも、海外から

は、対立者の排除・抹殺に「毒」が用いられたとの報道が伝えられるのである。

人類とも言う「人（ヒト）」は、その誕生以来、様々な「やまい（病気）」に悩まされて来ている。キリスト教的「考え」からすれば、「神」は、自らの姿に似せて、「人」を創ったと言う。とは言うものの、「土」から創られたと言う事もあってか、内因性の因とも言える「病原」を、体内に保有する事にもなるのである。その上、楽園追放により、苦悩は更に加味されるのである。「神の姿」は、形だけで、「人（ヒト）」は、その誕生以来、様々な苦悩を味合う事になるのであって、その最たるものが、「死」をもたらす「やまい（病気）」であると言える。

「天使」の様な邪心のない物心もつかない赤子ですら「やまい（病気）」に罹り、「死」に至るのである。「毒」によっても。

2章 スペイン風邪に見る感染症

I. スペイン風邪とは

今回の「新型コロナ」にしても、既に、世界中で100万人の犠牲者が出ており、結核の150万人に迫っていると言う。（「朝日新聞」2020年9月30日〈水〉朝刊）。

そして、トランプ・アメリカ大統領とメラニア夫人に陽性反応が出たとの報道があった。（同紙 2020年10月3日〈土〉朝刊）。

だが、

トランプ氏は2日未明に感染を公表し、同日夕、ワシントン近郊のウォルター・リード米軍医療センターに入院した。5日午後6時半過ぎ、マスク姿で建物から現れ、報道陣に向かって拳を握りしめたり、親指を立てたりした。大統領専用ヘリコプターでホワイトハウスへ移動した（後略）

同紙 2020年10月7日 朝刊

と言うのである。そして、12日には、陰性が確認されたとも言う。

現在、「新型コロナ」として世界の人々を悩ませている「ウイルス」による「感染症」について、史上、その例は、多々見られるのだが、先例として、第1次世界大戦中のヨーロッパで流行し、世界中に広まった「スペイン風邪（スパニッシュ・インフルエンザ）」が挙げられるので、100年前の「スペイン風邪」について考えてみる。

1918年から1919年にかけての冬に発生したスペイン風邪の大流行は、まるで14世紀のペストの悲劇を思い出させるような勢いで地球上に蔓延し、人類に冷水を浴びせたのである。

このときのスペイン風邪の大流行によって、世界中で5,000万人以上の命が失われたともいわれている。日本でも、2,300万人もの患者が発生し、死者は38万人を超えたと言う記録が残っている。

佐川峻・中原英臣 『偉人たちの死亡診断書』PHP研究所 1997 197-8頁
と言われ、「スペイン風邪」として喧伝され、スペインが発症源の如くに捉えられているのだが、戦争中の病気発生は、交戦国にとっては最大の機密事項であり、戦場で沢山の罹患者がいても、それを、安易に公表出来なかったのである。

その点、中立を保ち戦争に参加していなかったスペインは、

中立国だったスペインだけは統制がなく流行が大きく報じられた。
このために、「スペインかぜ」と呼ばれることになった。スペイン政府はこの名称に抗議したが、後の祭りだった。

石 前掲書 214頁

と言われる様に、自国の状況を公表した事で、汚名の如くに広まってしまったのだが、これは、考え様によっては、世界に注意を喚起したと言う点で、褒められてしかるべき事だとも言えるのである。須らく、物事には、二面性がある。従って、本稿では、一面の敬意を以て、「スペイン風邪」と言う言葉を使う。

発生源として、カンザス州のアメリカ軍基地、北フランスのイギリス軍基地、中国説もあると言う。

だが、

1918年（大正7年）秋季及1919年（大正8年）春季の大流行後、巴里に開かれたる聯合國衛生會議席上に於て各国代表者の所説を網羅せる記録によるも、今回の発生地は遂に不明なりとせり。

内務省衛生局編 前掲書 42頁

と言われるのである。

だが、

西班牙の衛生当局は、マドリッドに流行顕はざりし以前既に仏国戦線及瑞西に「インフルエンザ」流行の存在せることを指摘せり。

同上書 42頁

と言うのである。

レマルク Remarque, Erich Maria (1898–1970) の『西部戦線異状なし』(1929) がベスト・セラーになったが、その陰に、塹壕の中での「3密」の状態によって交戦国の兵士は、敵弾に当たってよりも、この「スペイン風邪」を始め、「やまい(病気・感染症)」で以て死んだ者の方が多かったと言うのである。

膠着状態に陥った西部戦線は、異常事態が起きていた。ウイルスはこの最強の防衛線をいとも簡単に乗り越えてきた。兵士が塹壕にすし詰めになった過密な戦いが3年半もつづいているところに、インフルエンザが侵入した。

両軍とも兵士の半数以上が感染し、戦闘どころではなくなった。ベルリンでは、毎週平均500人が死亡していた。米国軍の戦死者は5万3,500人だったのに対して、インフルエンザで死んだ将兵はそれを上回る5万7,000人もあった。

ドイツ軍の受けた打撃も大きかった。インフルエンザで約20万人の将兵を失った。

石 前掲書 214–5頁

と。「異常なし」ではなく、正に、『西部戦線異状あり』だったのである。

第1次世界大戦の特徴として、航空機、戦車、そして、ハーバーの信念(偏狭)による毒ガス等兵器・戦術の開発が盛んとなった。

そうした中、塹壕戦も挙げられるのだが、これは、今日の「新型コロナ」でも一番に注意しなければならないとされる「3密」の最たる「すし詰めになった過密な」状態だったわけで、それも戦場と言う「場」の衛生事情の中で。

そのため、

両陣営とも戦争継続が困難になり、大戦の終結が早まった。

同上書 215頁

と言われる「スペイン風邪」。

第1次大戦の終結を早めたと言われる功績を担ったのが「スペイン風邪」だったのだが、そのために、

各国から参戦した兵士は、ヨーロッパ戦線で感染して本国にウイルスを持ち帰ったために、一挙にインフルエンザのグローバル化が起きた。

同上書 215頁

と言う事で、世界中に広まった「スペイン風邪」に、日本も例外でなかったのである。

その症状については、

スペインかぜによる死は悪夢のようなものだった。まず症状が現れてから数時間で血液が肺の気腔にもれはじめる。2日までには、肺の酸素をふんだんに含んだ「スポンジ」から、血が染み込んだ「ぼろきれ」に変わった。患者は文字通り自分の体液で溺れ苦しんだのである。

オスターホルム＋オイルシェイカー 前掲書 316頁

と言われるものだったのである。

そして、それは、

1918年のパンデミックの原因となったH1N1ウイルスは、反ダーウィン主義だったと言える。どういうことか？そのウイルスは、老人や幼児や衰弱した人—免疫系が脆弱あるいは未発達な人々—ではなく最も強い「適者」、そして妊婦の命を重点的に狙ったのである。原因は5章で見た「サイトカインストーム」が健康な人々に起きたことだった。この免疫系の過剰反応は、肺、腎臓、心臓などの臓器に重大な損傷を与えるものでサイトカインストームによって瀕死の状態にある患者の治療法は1918年からそれほど進歩していない。

同上書 316頁

とも言われるのである。

そのためか、今回の「新型コロナ」が問題になって約1年、この間、世界中の研究機関が懸命に「ワクチン・新薬（特効薬）」の開発に取り組んでいるにも関わらず、未だ、完全なものが完成されたとは言われていない。

事前に対応策が採れない、「起こってみなければ分からない」と言う厄介なものなのだと言うわけである。

インフルエンザ・ウイルス研究によって、それにはA型・B型・C型の3種があることが分かった。（中略）このうち、最も感染力が強

く、人類を含む動物にとって脅威となるのはA型である。

速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ 人類と
ウイルスの第1次世界戦争』藤原書店 2020 24頁

と言われるのである。

そして、

最近の研究では、スペイン・インフルエンザは、トリ型ウイルス
が、直接、遺伝子変異を起こして、ヒトの間で感染伝播するように変
化し、ヒトの世界に侵入し、新型インフルエンザとして大流行したこ
とまで分かってきているという。

同上書 29頁

とも言われているのである。

ここ迄分かっていながら、未だに、結核に対するBCG（ビーシージー）、ペニシリン、ス
トレプトマイシン、天然痘に対する種痘の様な、ワクチン・特効薬が開発されていないの
だ。

その点に関して、

インフルエンザワクチンは最も効果の低いワクチンのひとつで、毎
年変える必要のある唯一のワクチンでもある。それはひとつには、イ
ンフルエンザの菌株が容易に変化するからである。そのため公衆衛生
を担当する部局では、その年はどの菌株が優勢になりそうかを専門的
な視点から予測するのだが、地球の反対側の状況を見ながら、それを
何ヶ月も前に行わなければならない。

オスターホルム+オルシェイカー 前掲書 119頁

と、「毎年変える必要のある唯一のワクチン」と言われる、それ程難しい「やまい（病気・
感染症）」なのだろう。

感染症は、「人（ヒト）」が森林を開拓し、家畜を飼うようになってからだと言う意見があ
るが、それ以前の狩猟・採集の時代は如何がだったのだろう。

人類とも言う「人（ヒト）」が誕生したのは何時の事なのだろうか。歴史の授業で、170万
年前と習った記憶があるが、現在では500万年前とも言われ、現生人類は20万年と言われて
いる。「人（ヒト）」の誕生と共に「やまい（病気・感染症）」も誕生したとも言えるかも知
れないし、或いは、「やまい（病気・感染症）」の因がある所に「人（ヒト）」が生まれたと
も言えるのかも知れない。

3章 日本に見る「やまい(病気・感染症)」

I. 「新型コロナ」とスペイン風邪

(1) スペイン風邪の日本上陸

「スペイン風邪」が日本に齎されたのが、海外から帰還した軍艦によってだったと言う。

海外よりの侵入径路に関しては大正7年5月上旬南洋方面より横須賀に帰港した一軍艦250名の同病患者を發し、次いで同年9月2日北米より横浜に入港した一船舶に多数の同病患者を有しこれ等より陸上に伝播したりと認むべき事実あるも、これを以て直ちに本病の初発なりと断じ難き理由あり。

内務省衛生局編 前掲書 103頁

また、

「矢矧」は呉を母港とする軽巡洋艦で、大正7(1918)年11月、日本に帰る前にシンガポールに寄港しました。艦長は、当初、「流行性感冒」を警戒し上陸を認めていなかったのですが、乗組員の士気低下を恐れたのか、条件付きで上陸を許可したところ、ウイルスが持ち込まれ、閉鎖空間である艦内で爆発的な感染が起こり、乗員469名のうち48名が死にました(死亡率10%)。

磯田道史『感染症の日本史』文春新書 2020 34頁

と言われるのである。

そして、その実態について、

11月30日から12月4日までの5日間に、士官4名、特務士官・准士官6名、下士卒286名、計306名の罹患者を出した(3)。これは本来の「矢矧」乗組員458名、便乗者11名計469名(3)の約65パーセントに当たる。

速水 前掲書 269頁

と言われ、その死亡者について、

結局、「矢矧」は、マニラ到着以前の死亡者1名を加え、計48名の死者を出した。乗員は、便乗者を加え469名であったから、死亡率は10・2パーセントとなる。

同上書 273頁

と、されるのである。

だが、「矢矧」の艦長の報告に、

文中に「最上」等の前例もあり、とあるから、インフルエンザ罹患は「矢矧」のみに起こったわけではなかった。

同上書 272頁

と、記されていると言う事からすると、上記、引用の内務省衛生局編の報告書に記されている、「大正7年5月上旬に南洋方面より横須賀に帰港したる一軍艦250名同病患者を發し」と言われている軍艦とは「最上」の事かも知れないし、或いは、別の軍艦かも知れない。

いずれにしても、「矢矧」より前に、こうして我が国へも伝播した「スペイン風邪」は、次の様な展開を見せたと言うのである。

本邦に於ては西欧の流行に後ること3、4箇月大正7年8月下旬より9月上旬に至り始めて蔓延の兆を呈し忽ち急激なる勢を以て全国に蔓延し、爾来大正10年7月に至るまで3回の流行を反復せり。

内務省衛生局編 前掲書 103頁

と言う記述から、大正7年8月下旬から10年7月に至る3年の間に、3回の流行が繰り返されたと言うのである。

この点からすると、現在の「新型コロナ」も「ワクチン」や特効薬の開発がなされなければ、長期に亘る恐れもあるかも知れない。

日本にも上陸した「スペイン風邪」に関して、国内における対応は如何がだったのだろうか。

これについては

本流行の端を開きたる大正7年8月下旬にして9月上旬にはようやくその勢いを増し、10月上旬病勢頓に熾烈となり、数旬を出ずして殆ど全国に蔓延し、11月最も猖獗を極めたり、12月下旬に於いて稍々下火となりしも翌8年初春極寒の候に入り再び流行を逞しうせり(後略)

同上書 104頁

と言われるのだが、「スペイン風邪」は「最上」、「矢矧」等、今回の新型コロナは、「ダイヤモンド・プリンセス」と言う様に発生源として船舶が話題にされるのだった。

これ等の場合、それぞれの艦・船内で発症者が明らかになった時点で、陸上の「人（ヒト）」に感染させないための有効な手立てを施す事が出来なかったのかと言う事である。

特に、今回のそれについては、100年前とは違い防疫体制が進歩しているはずなので、専門機関との連携を以て政治的判断に基づき行政が関わる事で違った対応が出来たのではないかと言う意見を聞く。

だが、「スペイン風邪」にしても「新型コロナ」にしても、国内に広がってしまったのである。

そして、「スペイン風邪」について、

今日迄知られたる疾病と同一ものなりや又既往の「インフルエンザ」が凡て同一の疾病なりしやは未だ確定せざる処なり。

今日に於いては「インフルエンザ」を他の通常の感冒又は鼻腔、咽喉の粘膜の炎症と画然たる区別を示すべき方法なく又「インフルエンザ」患者の他に伝染の危険なきに至る時期を定むる方法なし。

同上書 86頁

とされている事からして、「最上」、「矢矧」や、今日の、「ダイヤモンド・プリンセス」にしても感染源とされている側面があるが、それ以前に国内での発症はなかったのかと言う疑問も残る。

そうした事からして、現在の状況も100年前のそれと変わらないと言う印象を受けるのだが、それだけ、ウイルスが作用する感染症の「インフルエンザ」の対応が難しいと言う事の証左とも言えるのだろう。

その結果、大正期のそれは、

世界中で5,000万人以上の命が失われたともいわれている。日本でも2,300万人もの患者が発生し、死者は38万人を超えたと言う記録が残っている。

佐川・中原 前掲書 197-8頁

と言う状況だったと言うのである。

そして、その予防策としての「ワクチン」については、

「インフルエンザ」自身の予防の目的に「ワクチン」を使用することに関しては病原体の不明なる今日に於ては第1次の疾病に対し特異性の「ワクチン」を使用する学術上の根拠を見出す能はず、若し此の

意味に於て「ワクチン」の使用せらるるものあらば必ずや未知の病原体に対して一種の関係を有する「ワクチン」ならざるべからず而して其効果如何に関する在来の報告は一つとして確乎たる結果を伝ふるものと認むるものなし。

内務省衛生局編 前掲書 88頁

と言うのである。

従って、今日においてでさえそうであるが、対症療法でしか対応方法がなかったと言う事の様だ。

それ故に予防のためとして、現在でも言われているのと同じ様に、共通のコップの使用禁止、換気、学校を含む劇場、飲食店等、公衆の集会場の閉鎖、発症が確認された場合の患者の隔離、病院収容等を行政方針として示すとしたのである。

今日と違うのは、「患者の公示」であって、マスクの使用については自衛とするが、その使用方法については教育をすると言うものだったと言うのである。

(2) 対処方法

従って、100年後の今日も似たりよったりの事をしていると言う印象である。

だが、当時は、含嗽を奨励しているが、今日では、

世界保健機構（WHO）や厚生労働省などが手洗いやマスク着用を奨めているが、うがいの効果については、はっきりしていない。新型コロナウイルスに効果はあるのだろうか。

厚労省はウェブサイト上で新型コロナウイルスの予防法として、石鹸による手洗いや手指の消毒、マスクの着用などを挙げるが、うがいについての記載はない。

『朝日新聞』2020〈令和2年〉10月4日 朝刊

と言うのである。

一方、

京都大学の研究チームが2005年に国際医学誌に発表した論文だ。うがい風邪予防に効く可能性を示した。(中略) 実験した京都大の川村孝名誉教授(疫学)は「うがい薬のグループがもっとも風邪を引きにくいと予想していたが、水うがいのグループがもっとも風邪を引きにくいのは予想外だった」と振り返る。

同紙

とも言うのである。その点で、「新型コロナ」と風邪との因果関係は分からないが、上記の如く、「新型コロナ」には期待されていないとの事だが、風邪予防には嗽は効果的で、嗽薬のそれよりも「水うがい」の方がより効果的だと言うのである。

そして、「矢矧」の出来事から

ただ、不幸中の幸いだったのは、本来の「矢矧」乗組員のほかに、巡洋艦「明石」の乗組員がシンガポールから乗り合わせていたことで。地中海方面に派遣されていた彼らは、既にスペイン風邪に罹患していて、「矢矧」の乗組員が次々に倒れ、「機関停止漂泊寸前」の時に、「矢矧」の航海を支えたのです。一度かかると免疫が獲得されることも、この事件は教えてくれました。

磯田 前掲書 35頁

と言われる、「免疫」と言うものの重要性について確認させられるのだったが、それについては、既に、ジェンナー Jenner, Edward (1749-1823) によって開発された種痘による天然痘に対する免疫で知られている。

日本では、

弘化4年(1847)に長崎在住の藩医植林宗建がオランダを通じて牛痘苗を取り寄せたいと藩に願い出る。(中略) 宗建の願いは藩当局により許可される。翌嘉永元年1848に新任のオランダ商館付(中略)医員モーニッケが痘漿を持参したが、またしても腐っており摂取に失敗してしまう。しかし、先にシーボルトが接種に失敗した時も痘漿だったことを教訓に痘皮の方が腐敗しにくいのではと考えた宗建は痘皮での接種を藩に提案する。

同2年6月、オランダから取り寄せた痘皮が出島に到着した。宗建は自の息子と長崎在住のオランダ通詞の息子2人を出島に連れていき、モーニッケが3人に接種を試みたところ、宗建の息子が感染に成功する。

安藤優一郎『江戸幕府の感染症対策』集英社新書 2020 177頁

と言った事を契機に、種痘が普及していった事で免疫と言うものが知られる様になったと言える。

この「スペイン風邪」でも一度罹った者に「免疫」の効果があった様だ。だが、そのため

には、多くの犠牲者が必要でもあった。

「スペイン風邪」騒動の中、『復活』を以て新劇初の全国巡演を行い、主題歌『カチューシャの唄』の大流行と共にスターとしての人気を不動のものとした松井須磨子（明治29〈1886〉—大正8〈1919〉）が、人気絶頂の中、1919年1月5日に縊死するのである。

1918年11月に、「スペイン風邪」で急死したとも言われている島村抱月（佐々山滝太郎 明治4〈1871〉—大正7〈1918〉）の死の後を追ったのである。

それ以前、須磨子自身が「スペイン風邪」の疑いで臥せた時、抱月が看病しており、彼女は回復したのだが、彼が罹患、急死したため、それを悲しんでの自死だった。

早稲田大学の前身の東京専門学校で、坪内逍遙（安政6〈1859〉—昭和10〈1935〉）の指導を受け、文学や美学に興味を持った抱月は、『早稲田文学』の編集に携わった後ドイツへ留学。

帰国後、島崎藤村（明治5〈1872〉—昭和18〈1943〉）、田山花袋（明治4〈1871〉—昭和5〈1930〉）等と交友を結ぶが、逍遙主宰の「文芸協会」の演劇指導に当たるのだった。

だが、2度の結婚を経た須磨子との道ならぬ恋を契機に師とも家庭からも離れ、彼女と共に芸術座を設立（13）。以後、須磨子を中心としてイブセン Ibsen, Bodil Louise Jensen（1889—1964）、トルストイ Tolstoi, Aleksei Konstantinovich（1817—75）等の翻訳劇を相次いで上演し、新劇運動の指導原理を確立し、その実践の最中の出来事だったのである。

医学的にいうと、島村抱月はインフルエンザウイルスによる風邪で死んだわけではない。抱月の死因はスペイン風邪が引き金となって起きたと思われる細菌性の肺炎であった。

中原・佐川 前掲書 199頁

と言うのである。いずれにしても、須磨子の自死は抱月の死を悲しんでのものだった。

また、当時、歌壇で活躍していた与謝野鉄幹（明治6〈1873〉—昭和10〈1935〉）・晶子（明治11〈1878〉—昭和17〈1942〉）夫妻の家でも、

当時、晶子の家には11人の子供がいましたが、その1人が学校でスペイン風邪にかかり、次々に感染して、みな床に伏せてしまいます。

磯田 前掲書 32頁

と言われているのである。

この時には、首相原敬も罹患。元勲山形有朋等要路の人物に対しても、この「スペイン風邪」は例外としなかったのである。

そして、作家の志賀直哉は、自からの罹患体験を『流行感冒』に記しているのである。再確認の意味で、

A型インフルエンザの主要な病原巣（レゼルボア）、つまり感染源は野生の水鳥である。（中略）豚は鳥インフルエンザウイルスを人に感染させる上で重要な役割を果たす。豚の肺の細胞は、鳥インフルエンザウイルスを人に感染させるうえで重要な役割を果たす。豚の肺の細胞は、鳥ウイルスと人ウイルスの両方に適合するレセプターを持っているため、インフルエンザウイルスが、*互いに会い*混合するには理想的な場所だからだ。（中略）パンデミックの可能性と言う面から見れば、多数の人、鳥、豚が密集している場所ならば、どこでも最大級の危険地域だと言える。

オスターホルム＋オルシェイカー 前掲書 314－5頁

と言う。

華麗なる「白鳥の湖」は豚はいないまでも危険な場所なのかも知れない。

そして、

結論的にいえば、日本はスペイン・インフルエンザの災禍からほとんど何も学ばず、あたら45万人の生命を無駄にした。「天災」のように将来やって来る新型インフルエンザや疫病の大流行に際しては、医学上はもちろん、嵐のもとでの市民生活の維持に、何が最も不可欠かを見定めることが何より必要である。つまり、まずスペイン・インフルエンザから何も学んでこなかつたことを教訓とし、過去の被害の実際を知り、人々がその時の「新型インフルエンザ・ウイルス」にどう対したかを知ることから始めなければならない。なぜなら、人類とウイルス、とくにインフルエンザ・ウイルスとの戦いは両者が存在する限り永久に繰り返されるからである。

速水 前掲書 436頁

と言われるのである。

「人（ヒト）」がこの世に存在する限り、インフルエンザ・ウイルスとの「戦い」は続くと言う事である。この100年間の2回の「戦い」では、「人（ヒト）」は完敗とも言える。

Ⅱ. 感染症としての天然痘

「新型コロナ」と同様に、天然痘（痘瘡）も「ウイルス」による感染症だと言う。

これについては、我が国の歴史において、摂関政治を担い、一世を風靡した藤原家によって、貴族による華やかな世界が展開されたのだが、その陰に、時代を指導した藤原一族が悩まされた天然痘の猖獗により齎された悲劇があったのである。

その頃の我が国の「やまい（病気・感染症）」に対する対応として、悲田院とか施薬院と言ったものの存在が言われている。

悲田院〔ヒデンイン〕

非田処ともいう。貧窮者、病者、孤児等を救済するために設けた施設。初見は推古1（593）年とされるが、養老7（723）年興福寺に創設されたのが初例。8世紀中頃には平城京の左右京に、また諸国、諸寺にも設けられた。院司預、雑使がその任に当たった。

ブリタニカ

また、飢えに悩む者に給食し施療する施設として、723年興福寺に設置され、制度化されたのは聖武天皇（大宝1〈701〉－天平勝宝8〈756〉在位724－）の後光明皇后（大宝1〈701〉－天平宝字4〈760〉）によって730年に設けられてからだと言う施薬院。

施薬院〔セヤクイン〕

奈良、平安時代貧窮の病人に施薬施療をし、飢餓の迫った者を養ったところ。聖徳太子が四天王寺建立に際し施薬院を置いたと伝えられるが、制度として整ったのは天平2（730）年4月⇒光明皇后によって設けられてからである。藤原氏が⇒別当となり、費用をまかなった。⇒長官（かみ）である施薬院使には医道の⇒丹波氏が代々補せられ、使の下判官（じょう）、⇒主典（さかん）、医師、史生などがおかれた。平安時代初期までは大いに社会的意義があったが、次第に衰え、鎌倉時代に僧⇒忍性が極楽寺に、戦国時代に豊臣秀吉が京都に、これを再興したと伝わるにとどまる。江戸時代になって享保7（1722）年12月、幕府が新たに江戸小石川に養生所を設け窮民に治療を施している。

ブリタニカ

と言われる様に、我が国においても、国家としての体制が整えられるに従って、医療に対する手立ても考えられる様になったと言えるのだ。

そして、施薬院での活動に貢献したと言われている光明皇后は、藤原不比等の3女で、後述する藤原4兄弟の妹であり、聖武天皇の母は皇后の姉だったとも言われているのである。天皇の近親結婚。

やがて、施薬院で興った事業は、仏教の興隆に伴い、疫病退治の祈祷・護符の配布等と共に寺院・僧侶の活動の一環となっていくのである。

そうした中、鎌倉時代の真言律宗の僧忍性（建保5〈1217〉-嘉元1〈1303〉）がハンセン病者に寄り添っていたと言う事が伝えられている。

だが、

癩は古代から伝染病と考えられていた。『令義解』^{りようぎげ}戸^こ令^{りよう}は、癩は虫が五臓を食うのが原因としている。眉毛や睫毛が脱落し、鼻柱が崩れる。声がかすれて関節が^{かいらく}解落する。人に伝染するから床を一緒にしてはいけないと注意している。この時代、既に伝染病との認識があったのである。

一方、仏教では悪行の報いとされた。（中略）この病に罹るのは法華経誹謗の悪行の結果だというのである。

理崎啓『忍性の真実 極楽寺良観と戒律』哲山堂 2018 82-3頁とも言われており、癩が、既に、「人（ヒト）」を蝕んでいたと言う事が分かると共に、当時の仏教の在り方の一面を知る事が出来るのである。

こうした悲田院や施薬院と言った施設での活動がありはしたが、「やまい（病気、感染症）」の脅威は、これを上回るものであり、

藤原鎌足の孫にあたる房前は文武天皇のときに東海道巡察使となった。元正天皇の時代になると、36歳で参議となり、やがて内大臣となる。この間、房前は文武、元正、聖武の3代の天皇に仕え、藤原氏の基礎を固めていく。737年4月17日、房前は56歳の生涯を終えた。死因は「疱瘡」、今でいう「天然痘」であった。

中原・佐川 前掲書 137-8頁
と言うのである。

中臣鎌足（推古22〈614〉-天智8〈669〉）が天智8（669）年、「藤原」の姓を賜り、次男の不比等（斉明4〈658〉-養老4〈720〉）の門だけが藤原姓を襲い、その長男武智麻呂（天武9〈680〉-天平9〈737〉）が南家、次男の房前（天武3〈681〉天平9〈737〉）が北家、3男宇合（馬養 持統8〈694〉-天平9〈737〉）が式家、4男麻呂（持統9〈695〉-天平9〈737〉）が京家の始祖となり藤原4家が成立。その後の藤原家の基を築くのだった。

そうした藤原家において、

737年に天然痘で死んだのは、房前だけではなかった。実は、藤原4兄弟が次々に天然痘で死んだのである。4月17日の房前に続いて、7月13日には4男の麻呂、7月25日には長男の武智麻呂が相次いで天然痘で死亡する。

最後に残った3男の宇合も、8月5日に天然痘で死んでしまった。わずか100日余りの間に4人の兄弟が死亡したことは、権力を掌中にしていた藤原氏一族にとって、正に存亡の危機となった。

同上書 138-9頁

と言われるのである。

位人身を極めた藤原一族と言えども、「やまい（病気・感染症）」には勝てなかったのである。

そうした藤原家との関わりを示唆するかの様な事が記された新聞記事が掲載された。

奈良文化財研究所の神野恵・考古第2研究室長(46)が、奈文研の公式ブログに掲載した。天然痘が平城京を襲ったとされる8世紀前半、人々は、疫病は鬼がもたらすと考え、まじないの言葉や記号を書いた呪符木簡で退治しようと考えた。一方、食器など、感染者が触ったものを捨てていた可能性があるという。

「食卓の感染対策 奈良時代も?『使い捨て皿』平城宮跡近くで出土」2020(令和2)6月22日(月)「朝日新聞」夕刊

と言うのである。

そして、それが、

奈良市の平城宮跡近くの二条大路沿いにある穴のような土坑。土坑は奈良時代のゴミ捨て場とされ、この遺稿から破損の少ない食器が多数出土した。そばに藤原4兄弟の末弟麻呂の屋敷があったとされ屋敷から捨てられた可能性が高いと言う。

同紙

とも言われるのである。

この事については、藤原麻呂の屋敷があったとされる所からの出土と言う事から、使い回しや共用の食器の使用に注意を払い、感染予防のために、使い捨てのための粗雑な土器が使われる様になったのではないかと言うのである。

こうした天然痘について、

てんねんとう【天然痘】

疱瘡（ほうそう）、痘瘡（とうそう）とも。ウイルスによる法定伝染病であるが、日本には常在しない。発熱をもって始まり、全身の発疹が膿疱（のうほう）化し、やがて癍痕（はんこん）（あばた）を残してなおる。流行によってはかなりの死者を出す。種痘による予防が唯一の対抗手段である。1967年にWHO痘瘡根絶計画が開始され、1979年には天然痘根絶宣言が出され、古来からの疫病であった天然痘は地上から消滅した。

マイペディア

と言われるのだが、

実は1976年の天然痘根絶は、世界保健機関が第2次世界大戦以来感染症による人類の死を減少させるのに著しい成功を収めてきた、その頂点をなすものだったということが今では明らかである。そのとき以降感染症を引き起こす微生物が反撃を開始した。

ウィリアム・H・マクニール 佐々木昭夫訳『疫病と世界史』（上）12頁とも言われ、「人（ヒト）」が、対応に成功し、天然痘は「根絶」された事になっているのだが、そう思っていたところ、「微生物が反撃を開始した」と言うのである。また、新たなる挑戦を余儀なくされる「自然」との「闘い」、或いは、「共存」。

ペストに悩まされた中世のヨーロッパの「人（ヒト）」が、「神」の存在に疑いを持つ様になった如くに、「人（ヒト）」を悩ます「やまい（病気・感染症）」を、何故、「神」は、「人（ヒト）」に齎したのだろうか。

痘瘡ウイルスは大型のウイルスで、一辺が160～250nmの六面体をしており、接触感染する。

ブリタニカ

と言うウイルスが潜伏期10から14日で前駆疹が現れ、3日位で解熱してから3、4日で本格的な発疹が出、この時期に死に至る事があると言う天然痘（痘瘡）は、我が国の歴史においても古くから知られており、悩まされてきたわけである。

文献に残るもっとも古い中国大陆との交渉は西暦552年に始まる。この年、仏教を伝えんとする朝鮮からの使節が日本の土地に始めて足跡を記したが、異国人たちはおそらく天然痘と思われる或る致死率の

高い未知の病気を持ってきた。

マクニール 前掲書 226頁

と言われるのである。

その後の日本の国造りに多大な影響を与える事になる、4世紀頃伝えられたと言う儒教、そして、6世紀中頃(538/552)、朝鮮を経て伝えられたと言う仏教。

これらは国造りには大きな役割を果たすのだったが、こうした大陸との接触をする事で、それ迄、未知だった「やまい(病気・悪疫・感染症)」が齎される原因にもなったわけである。

鑑真和上(垂拱4〈688〉-天平宝字7〈763〉)が6度の試みで日本来訪を果たすのだが、その間に失明してしまったと言う。その原因は何だったのだろうか。

遣隋使(推古8〈600〉-同22〈614〉)、遣唐使(舒明2〈630〉-〈894〉)、「白村江の戦」(663)等に見られる様な朝鮮や中国との接触。

そうした中、位人身を極めた藤原家の兄弟4人が相次いで、それも同じ年に死んだと言うのである。長男の57歳から4男の42歳迄と。

この事は、8世紀前半の時に、高官でさえ死を免れない天然痘が都の地域に流行っていたと言う事である。

更に、「倭寇」(13-16世紀)や、鉄砲を伝えたとするポルトガル人を乗せた王直(洪武2〈1379〉-天順6〈1462〉)、日本人の妻を娶った鄭芝龍(万暦32〈1604〉-永暦15〈1661〉)とその息子成功(万暦32〈1604〉-永暦15〈1661〉)親子と言った海商(賊)等の様に、異民族との接触(交流)は、それ迄日本にはなかった疫病を齎す事にもなったと言う事は想像に難くない。

そのためもあってか、「使い捨て皿」が使われていたと言うわけであろう。

当時、食器として使われていた焼き物は水を吸いやすく、表面もざらざらしていて、洗いにくかった。汚れが残りやすく繰り返しの使用は不衛生だと考えられるという。

「朝日新聞」前掲紙

そして、

『「不特定多数が使った食器は使い回さない』。この感染予防策は、天然痘の経験から生まれたのかもしれない」と神野さん。

同上紙

と言うのである。

「やまい(病気・悪疫・感染症)」平癒のために行われたのが、神仏への祈願であり、天皇

始め有力者が寺社を建立。様々な災厄を逃れるための祈祷、護符の作成等の活動を行い、東大寺の建立、大仏の作成はその代表とも言えるのである。尤も、これには莫大な費用を要し、それを「民」に依存したため、人心が離れていったとも言われているのである。

Ⅲ. 結核に見る感染症

昭和の時代、我が国では、その90パーセントとも言われるものが肺に巣食った事で以て、肺病と言われていた結核で死に至った「人（ヒト）」が多かった。

結核

結核菌はほとんどあらゆる臓器を侵すが、飛沫感染によって呼吸器に侵入することがほとんどで、⇒肺結核が最も多い。急激に発病して全身症状を示す⇒粟粒結核症のような例もあるが、普通は緩慢な経過をたどり微熱、寝汗、衰弱、咳嗽（がいそう）等比較的軽微な症状を示し、ときとしてはそれさえ欠く、独特な慢性病の型を取ることが多い。

ブリタニカ

と言われ、十分な栄養の摂取と静養をする事以外に効果的な治療もなく、国民病とも言われ、その倦怠の様から「怠け病」と言われもした結核。

昭和の前半期には、戦争の影響もあり、十分に食糧を手に入れる事も難しく、ましてや、栄養価の高い（滋養とも言った）物を手に入れる事は至難で、卵やバナナは病気見舞いの定番の品だった。

そうした事で、基礎体力に欠けた多くの「人（ヒト）」が死んでいく中で、前途有為の若者も多かったのである。

筆者の次姉も女学校時代、肋膜炎（胸膜炎）を患い、従兄は18歳で亡くなっている。「勉強をし過ぎると肺病になる」とも言われていたのであるが、2人とも勉強家だった。

家族等に感染させないため、知人にもいたが、サナトリウムとも言われ結核専門病院と言った街中から離れた場所で療養する事が多く、海や山と言った所に転地する者もいたが、恵まれた者達だ。

堀辰夫の名著、『風立ちぬ』（昭和11〈1936〉-13〈8〉）の主人公節子も、そうした1人だった。だが、彼女は回復せず、逝った。

東京大学国文学科に入学するが、中退、ジャーナリストとしても働くが、鶯谷の因になったとも言える「雀より鶯多き根岸哉」と詠んだ根岸の自宅を拠点に文学活動に専念し、同大予備門時代からの夏目漱石（慶応3〈1867〉-大正〈1916〉）等の文人達と幅広い交流を持った俳人・歌人の正岡子規（慶応4〈1867〉-明治35〈1902〉）。

高浜虚子(明治7〈1874〉-昭和〈1959〉)、河東碧梧桐(明治6〈1873〉-昭和12〈1937〉)等多くの門人の中でも、彼を慕って根岸に移り住む様になった画家で書家の中村不折(慶応2〈1866〉-昭和18〈1943〉)と共に、日清戦争の従軍記者として中国へ赴いた事もあったのだが、『俳人蕪村』をものした頃から病床に伏す様になるのだった。

脊髄カリエスに呻吟し、母と妹の律を故郷松山から呼び寄せたのだが、35歳で没するのである。

そうした中、根岸で3度住まいを変えた不折が、最後には、子規の死後だったのだが、子規庵の斜め向かいに転居(現在の書道博物館)。彼は、そこに、亡くなる迄住み続けたと言うのである。何と幸せな2人。



写真3 子規の住いと道を隔てた不折の旧宅の跡の書道博物館

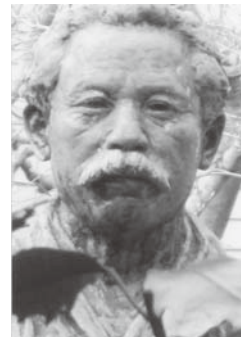


写真4 中村不折像(書道博物館)

そして、徳富蘆花(明治1〈1868〉-昭和2〈1927〉)が『国民新聞』に発表し、評判となった長編小説『不如帰』。それは、新派悲劇として上演され、尾崎紅葉(慶応3〈1867〉-明治36〈1903〉)の『金色夜叉』と共に新派を代表する演目となるのだった。

主人公の川島浪子が肺結核に罹り、療養のため夫川島武男海軍少尉と別れ、一人、神奈川県逗子に静養する事になるのだったが、その逗子海岸での武男と浪子との二人の遣り取りが、新派の名場面となり舞台を湧かせたのである。

この浪子のモデルになったのが、日露戦争の際の満州軍総司令官だった大山巖元帥の娘だったと言う事で一層の評判を得るのだった。

そして、『ノクターン』、『幻想ポロネーズ』等を作曲し、「ピアノの詩人」と言われたショパン Chopin, Frederic Francois (1810-1849) も、結核でその39年の生涯を閉じるのだった。

こうした結核について、

結核の最初の徴候は、今から8000年前、農業の発達に伴い、人々が集落生活を送り始めた時代に現れた。紀元前3000年のエジプトのミイラの何体かは、明らかに結核の症状を示している。

ウイリー・ハンセン／ジャン・フレネ 渡辺格訳『細菌と人類
終わりのなき攻防の歴史』 中央公論新社 2020 167頁

と言われ、

石器時代やエジプト古王国時代の人骨も、結核に侵された痕跡を残すことが、調査の結果分かった。もっとも、肺結核に侵されていた証拠となると、ことの性質上きわめて乏しいのは当然である。

マクニール 前掲書（下） 47頁

とも言われるのである。

また、

結核の歴史は、産業革命から始まる。19世紀に入り、結核が急速に増えたヨーロッパでは、当時、結核は「白いペスト」と呼ばれ、人々から非常に恐れられた。

中原・佐川 前掲書 177-8頁

とも言われ、近代化に伴う産業の発達の中で、『女工哀史』等に見られる劣悪な労働条件の下での長時間労働もこれを助長。日本で、国民病と言われはしたが、決して、日本特有のものだったわけではないのである。

中国の医学書にも、インドのマヌ法典にもそれを思わせる記述があり、アメリカ大陸でも8世紀頃のミイラの骨に結核感染が見られると言う。（ハンセン／フレネ 前掲書 167頁）この様に、地球の広範囲にわたったものだったわけである。

だが、こうした若者を含む多くの命を奪った結核だったのだが、「近代細菌学の開祖」と言われ、1905年、ノーベル生理学・医学賞を受けるコッホ Koch, Robert (1843-1910) により、1882に結核菌が発見され、90年には結核菌からツベルクリンが作られるのである。

翌91年、ベルリンに伝染病研究所を設立。そこでは、牛疫、アメーバ赤痢、ペスト、マラリア等も研究され、北里柴三郎（嘉永5〈1852〉-昭和6〈1931〉）等全世界から細菌学を学ぶために人々が参集するのだった。

また、ウクライナ生まれだがアメリカに帰化し、1952年にノーベル生理学・医学賞を受賞するワクスマン Waksman, Selman Abraham (1888-1973) 等が、結核菌に有効な、放線菌の一種であるアミノ糖抗生物質のストレプトマイシンを発見。

1943年、アルベルト・シャッツ、エリザベス・プジーなどと共同して、ワクスマンはついにストレプトマイシンを得る事が出来た。(中略)最初の治療は1944年11月20日に始まった。1945年、34人の患者に対する試用でストレプトマイシンの有効性が確認され、その効果は直ちに非常に大きなものとなった。例えば、1946年から1953年の間に、フランスでは結核による死亡者は3万3,699人から1万5,692人に減った。ストレプトマイシン以前はほとんど助からなかった結核性脳脊髄膜炎も治療可能となったのである。

ハンセン／フレネ 前掲書 185-6頁

とも言われ、今日では、

最も有望なものはフルオロキノロン系製剤である。

同上書 186頁

と言われているのである。

1908年、フランスのメチニコフ Mechnikov, Il'ya (1845-1916) と共にノーベル生理学・医学賞を受ける。ドイツのエールリヒ Ehrlich, Paul (1854-1915) の元へと明治34 (1901) 年、ドイツへ留学し、結核の化学療法剤の研究をした志賀潔 (明治3 〈1870〉-昭和32 〈1957〉) 等によって開発されたストレプトマイシンの普及により、改善される様になるのだった。

1921年、結核に対して部分的に効力のあるワクチンの完成したため、

人体にあまり影響を与えず菌だけを殺す抗生物質が、第2次大戦の戦中戦後に開発されたため、近代的医療を受けられる場所では、結核は前ほど深刻でなくなった。

マクニール 前掲書 201頁

と言われるのである。

こうした研究者による努力と共に、生活水準の向上とが相俟って、1950年以降、若年者の発病や死亡率が激減する様になったと言う。

だが、

非常に早く、結核菌はストレプトマイシンに耐性を見せるようになる。

同上書 186頁

戦後マラリアがドラマティックな後退を示したあと結核はおそらく世界全体で最も広い範囲にまたがって執拗にはびこっている感染症である。

同上書 201頁

とも言われるのである。

そのためか、今日でも結核がニュースになる事があり、1997年から、免疫力の低下した高齢者の発症を中心に増加に転じているとも言われ、油断が出来ないものではある。

IV. 沖縄「戦争マラリア」

アレクサンダーの命を奪った病気は、高熱が続いたところから、おそらくマラリアだったと思われる。

中川・佐川 前掲書 205頁

と言われるマラリアについて、日本人にとっても多大な「死」を齎す「やまい（疾病）」となったのである。

明治維新を経て誕生した「大日本帝国」による大国（になりたいと言う）、一等国意識と、それに伴う拡張主義によって起されたと言える日中戦争、「大東亜戦争（太平洋戦争・第2次世界大戦）」による戦線の拡大により中国大陸、インドシナ半島、フィリピン、インドネシア等の東南アジアと言った地域への進出。

これにより数多くの兵士が各方面に送り込まれたのである。だが、それらの地には風土病とも言える地域特有の「やまい（病気・感染症）」が存在していたのである。

中でも、マラリアは、多くの兵士の「命」を奪い、一説によると、食糧の供給の困難さによる餓死と共に、戦闘による死者（戦死者）をはるかに超える「人」の「命」を奪ったと言うのである。

マラリア（malaria）

マラリア原虫の寄生によっておこる病気⇒ハマダラカの刺咬によってヒトからヒトに伝播する。⇒感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律で4類感染症と定義される。悪寒、戦慄を伴う40℃前後の発熱が特徴で、熱型によって、三日熱、四日熱、熱帯熱に分けられる。普通はカに刺されてから10～14日の潜伏期を経て発病する。3～6時間後発汗と共に下熱し、以後3日あるいは4日目ごとに発熱を繰り返すが、熱帯熱の場合は不定型であり、また慢性化すると一般に熱型は不定になる。⇒キニーネが長い間特効薬とされ、次いでアテブリン、プラスモヒンが開発され、第2次世界大戦後はリン酸クロロキンが使用されている。古くから人類を悩ました感染症で、熱帯では現在でも流行している。

ブリタニカ

こうしたマラリアについて、

マラリアは主にヒトの病気で、蚊はマラリア感染者を刺すことで感染し、その蚊がまた別の人間を刺して感染させていく。

オスターホルム+オルシェイカー 前掲書 227頁

と言い、

その蚊について、

すべての蚊が危険なわけではない。蚊には約3,000の種があるが、媒介となってヒトにウイルスを感染させる蚊は比較的まれだ。それでも、病気を媒介する蚊が動物界一の公衆の敵であることに変わりはない。

同上書 226頁

と言うのである。

そう言われる蚊に媒介されるマラリアに纏わり、

石垣島に駐留していた第45旅団が移住命令を出したのが、1945年6月1日だ。その内容は、「官公庁は6月5日までに、一般住民は6月10日までに軍があらかじめ指定した石垣島中央部の山間部へ移住せよ」

大矢英代『沖縄「戦争とマラリア」』あけび書房 2020 ②6頁

と言われた事が始まりで、八重山の人々に悲劇が襲うのだった。

当時の八重山諸島全人口(31万671人)の53・8%(1万6,884人)がマラリアにかかり、うち21・6%(3,647人)が死亡した。一家全滅は62戸(201人)、孤児は198人にのぼった。このうち軍命による移住が原因で死亡した住民は3,075人で、八重山諸島全人口の10・3%に当たる。(『戦時中の八重山地域におけるマラリア犠牲の実態』沖縄県生活福祉部 1992年)

同上書 ②6

と、多くの犠牲者を出したと言うのである。

その背景にあるのが、

石垣島の住民たちは島内の山間部(於茂登岳など)へ。波照間島、黒島、鳩間島、竹富島、新城島の住民たちは、西表島へ強制的に移住

させられた。移住先はマラリア有病地だった。

同上書 ②⑤

と言われる土地への強制移住によるものだったのである。

そうした中、波照間島国民学校児童が抱いた、海を隔てて見える故郷に対する望郷の念。それを後輩の児童が詩として残していると言う。



写真5 西表島へ疎開させられた人びとが住んだ
南風見田の海岸



写真6 西表の悲劇を忘れないための「忘勿石之碑」
(波照間島国民学校識名信升校長の文字)

この背景にあるのが、沖縄本島において地上戦が始まり、そこで、「生きて虜囚の辱めを受けず」を詠う「戦陣訓」にも拘らず、捕虜になった「人」が情報を提供したと言う事で、それを警戒した軍部による「作戦」の一環としての疎開だったと言う。これを主導したのが陸軍中野学校出身者だった。

「戦陣訓」

日中戦争の長期化に伴い戦争の早期解決が望まれ、さらに戦場における将兵の非同義的行為が続出したため、1941年東条英機陸相が全陸軍将兵に対して戦陣の道義的高揚を促した示達書。実践的綱領が主内容で、序、本訓、結びからなる。

マイペディア

特別天然記念物「イリオモテヤマネコ」で有名な西表島ではあるが、そこには、こうした出来事があったのである。

一説によると、「人」に「災厄（死）」を齎すものとして、マラリアを媒介する蚊、戦争等「人」同士による災厄、蛇、犬、「家畜を殺す」と言う意味を持ち人間にも眠り病を齎すツエツエ蠅があると言われるのである。

蚊は、マラリアを媒介し、最悪、死に至らしめるのであって、歴史の上でも沢山の悲劇を齎したと言うのである。

マラリア原虫などは、おそらく人類誕生以来、いやそれ以前からの寄生生物と考えられるが、現在でも依然として、宿主となる人間に高熱とそれに伴う衰弱と言う害を与え続けている。

マクニール 前掲書(上) 38頁

そうしたマラリアについて、

ヒトに感染するマラリア原虫には少なくとも4種が確認されているが、そのひとつである熱帯熱マラリア原虫(*Plasmodium falciparum*)の場合が、特に患者には悪性の症状を呈する。

同上書 38頁

と言われるのだが、

今日知られている古い時代のマラリア地理などを考慮すると、サハラ以南のアフリカが、この形の寄生現象が発展してきた主要な、殆ど唯一の中心地だったとみられる。

同上書 49頁

と言われるのである。

そして、

「アウストラロピテクス」

最古の化石人類で猿人の一部をさす〈南のサル〉の意。オーストラロピテクスとも言うアウストラロピテクスが175万年以上前に、南および東アフリカで生活していた。

マイペディア

とされているのである。

アフリカで農耕が熱帯雨林に広がり始めたとき、焼畑農法は従来の生態的バランスに、はっきり今までとは違った新しい局面を付け加えた。予期しなかった結果のひとつは、マラリアが今までになかった激しさで真に疫病の名に値する猛威を振るいだしたことである。

マクニール 前掲書(上) 94頁

と言われる様に、マラリアは、「人(ヒト)」の「生」の営みの拡大に伴って、「人(ヒト)」に脅威を与える様になったと言うのである。

だが、それは、他の「やまい(病気・感染症)」についても言える事でもある。

結

本稿では、ウイルスに基づく「新型コロナ」の猛威に鑑み、「近代化日本」と言う主題との関係で、「人(ヒト)」と自然、特に、「やまい(病気・感染症)」との関わりについて考察した。

「人(ヒト)」は「文明」と称するものを掲げ、「合理」を基調とした「進歩・発展」を「是」とする「生きる」を誇らしげに続けて来たのだが、そこには、「自然」、それは、「やまい(病気)」, 就中、「感染症」と言うものによって、しっぺ返しをされているのではないかと言う感じを受けさせられる側面がある。

「人(ヒト)」が自らの「生きる」のために、家畜を飼ったり、農業と言う生産活動を行う様になり、それに伴って、自然を破壊し、それと共に、「やまい(病気・感染症)」を掘り起こし、それを拡大させて来たとも言える。

「人(ヒト)」がより活発な活動をすればする程、細菌、ウイルス等も活発かつ顕著な活動(猛威)を示す事になるのである。

この事は、「人(ヒト)」の思い上がり(ヒュブリス)を「神」が思い出させ、反省を促しているともとれると言えるのではないかと思考する。

本稿では、具体的な「やまい(病気・感染症)」として、「新型コロナ」に関わる事から、大正期の「スペイン風邪」、結核、天然痘、マラリアについて考えてみたが、その他のものについては、続編で考えていきたい。

(続く)

参考文献

- 1) 安藤優一郎『江戸幕府の感染症対策 なぜ「都市崩壊」を免れたのか』集英社新書 2020
- 2) 石弘之『感染症の世界史』角川文庫 令和2
- 3) 磯田道史『感染症の日本史』文春新書 2020
- 4) 大矢英代『沖縄「戦争マラリア」強制疎開死3,600人真相に迫る』あけび書房 2020
- 5) 加藤茂孝『人類と感染症の歴史 未知なる恐怖を超えて』丸善 令和2
- 6) 佐川峻・中原英臣『偉人たちの死亡診断書 マルクスの肺がん・家康の食中毒』PHP研究所 1997
- 7) 内務省衛生局 編『流行性感冒「スペイン風邪」大流行の記録』東洋文庫 平凡社 2020
- 8) 速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ 人類とウイルスの第1次世界戦争』藤原書店 2020

- 9) 堀辰雄『風立ちぬ・美しい村』新潮文庫 平成25
- 10) マーク・オルシェイカー+マイケル・オスターホルム五十嵐加奈子・吉嶺英美・西尾義人訳
『史上最悪の感染症 結核, マラリアからエイズ, エボラ, 薬剤耐性菌, COVID-19まで』青土社
2020
- 11) ジャン・フレネ／ウイリー・ハンセン 渡辺格訳『細菌と人類 終わりになき攻防の歴史』中公
文庫 2020
- 12) W・H・マクニール 佐々木昭夫訳『疫病と世界史』(上)(下) 中公文庫 2020

本稿を学生時代からの友人岩井宣俊氏, 姉 橋本敬子の霊に捧ぐ。

Research Notes

**The Modernization of Japan:
The Connections with Europe and America
from the Viewpoint of world history**

Diseases Throughout History

MATSUBARA, Masamichi

This year, our human being is faced New type corona virus influenza COVID-19. So, this time I try to research about diseases in the history. Therefore, I titled this essay.

“The diseases in the History”

In the first chapter, I look in About diseases in encyclopedia.

In the second chapter, I look in about Spanish influenza as infectious Diseases.

In the Third chapter, I look in the diseases in Japan. Especially, Spanish influenza, smallpox, tuberculosis and malaria.